

『徒然草』第百五段考：典拠と虚構性について

藤崎， 祐二
九州大学大学院博士後期課程

<https://doi.org/10.15017/19778>

出版情報：語文研究. 108/109, pp.41-53, 2010-06-02. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



『徒然草』 第百五段考

— 典拠と虚構性について —

一

『徒然草』には、作意の不明瞭な章段が散見する。客観的事象のみを記して筆者の見解がないものや、物語の習作めいた文章など、形態は多様である。『徒然草』が、自ら標榜するところとは裏腹に、決して取り留めもなく書き綴られたものではないということは、常に指摘されているところであるが、それならば、これらの章段については、どのように考えればよいのであろうか。本稿は、作意の不明瞭な章段の一つ、『徒然草』第百五段の執筆の手法を考察するとともに、その意図を問うものである。

『徒然草』第百五段は、物語の一齣を切り取ったような内

容であり、筆者の意図するところはにわかに計り難い。まずその全文を掲げる。

①北の屋かげに消え残りたる雪の、いたう凍りたるに、さし寄せたる車の轆も、霜いたくきらめきて、^②有明の月さやかなれども、限なくはあらぬに、人離れなる御堂の廊に、なみなみにはあらずと見ゆる男、女となげしに^③尻かけて、^④物語するさまこそ、何事にかあらん、^⑤尽きすまじけれ。かぶし・かたちなど、いとよしと見えて、^⑥えもいはぬ^⑦匂ひの、さとかをりたるこそ、をかしけれ。けはひなど、はつればつれ聞えたるもゆかし。^⑧

凍てつくように寒い日の夜明け頃であろうか、人気のない御堂の廊で、いわくありげな男女の語らう様子が描かれている。ここに、兼好の平安貴族文化への憧憬を窺うことは容易だが、

藤 崎 祐 二

それ以上の思惑を読み取るとは難しい。物語作品への深い造詣を基に、筆の赴くままに書き綴られたと見るのが自然であろう。

次に、先行研究における見解を確認する。この章段は、『徒然草拾遺抄』に「私兼好家集、冬の夜あれたる所のすのこにしりかけて、木^a高き杉の木の間よりくまなくもりたる月を見て、暁まで物語し侍ける人に云々。」と、『兼好法師集』三十三番歌の詞書が引かれて以来、筆者兼好の実体験に基づいて書かれたと考えられている。三十三番歌は次の通りである。

冬の夜、^a荒れたる所の^b簀子に^c尻掛けて、小高き松の木の間よりくまなく洩りたる^d月を見て、あか月まで物語りし侍ける人に^e

思ひ出づや軒のしのぶに霜^②さえて松の葉わけの月を見し夜は^③

女と語り明かした夜を思い出して、相手に送った歌であろう。『徒然草』第百五段との類似を、逐一確認する。両者の類似箇所は傍線を付し、番号で対応関係を示した。まず、場面全体の共通点として、「寒空の下で月下の男女が語り合っている」という構図を挙げることができる。また、傍線②の「霜いたくきらめきて」と「霜さえて」という情景描写も重

なる。さらに、『徒然草』第百五段では、人物は傍線⑤「なげしに尻かけ」ており、『兼好法師集』でも傍線⑤「簀子に尻掛け」ている。『兼好法師集』三十三番歌が、兼好の実体験に基づいて詠まれたものであることを前提に据え置くと、よく似た内容の『徒然草』第百五段が、同じ体験を基にして書かれたと考えることは容易である。章段に描かれている人物「なみなみにはあらずと見ゆる男」は、兼好自身を第三者に見立てたものではないかと考えられるのである。

例えば、佐野保太郎氏は、『徒然草』第百五段の注釈で『兼好法師集』三十三番歌に触れ、「この段は、恐らくこの経験がもとで出来たものであらう。」^④と言及したのであるが、安良岡康作氏も、作者が自己の経験したところを第三者的立場から描いたとする通説について、「余りにも道具立てが整いすぎているので、これは、認めなくてはならないところである。」^⑤と述べている。一方、富倉徳次郎氏は、実体験に基づく指摘だけでなく、次のように、虚構を交えた可能性にも言及した。

この歌とこの一文とを対照する時、何人もその間に一脈の関連のある事を認めずにはいられないであろう。だが私はこれをそのまま兼好の恋愛体験の自画像だと断じるのではない。ただここにはそうした体験が母体となつて、

そこに多分に物語化の行われているということを面白いと思うのである。^(注6)

稲田利徳氏も、富倉氏と同様、実体験に虚構を交えた可能性を指摘し、その理由を次のように述べている。

従前は両場面の関連を指摘するにとどまり、それ以上の展開はなされていない。が、両者の関連を認めた上で、さらに相違する面の意味を尋ねることも重要であろう。

相違するところは、家集の「荒れたる所」が、百五段では「北の屋陰……」とか「人離れたる……」とかなり具象的描写になっていることや、「えもいはぬ匂ひ……」や月光の描写などにも認められるが、一番重要な相違は、作者自身の体験を、百五段では第三者に客体化し、しかも「なみくにはあらずと見ゆる男」と描写していることである。両場面が同じ体験であることを前提とすれば、この相違や^①ずれは虚構化によって生じたものと考えねばならない。^(注7)

『徒然草』第百五段と『兼好法師集』三十三番歌との間には、場面設定や描写に相違が見られることから、兼好自身の体験をそのまま描写しているのではなく、虚構が施されたとする。

二

このように、先行研究の多くは、『兼好法師集』三十三番歌の内容が実体験に基づくことを前提とした上で、類似する『徒然草』第百五段も、同じ体験が母体である可能性を指摘している。

しかし、『徒然草』第百五段の母体となったものは、必ずしも『兼好法師集』三十三番歌に限らないように思われる。

『兼好法師集』三十三番歌を引用した『徒然草拾遺抄』には、同時に「私帚木 門ちかき廊のすのこだつ物にしりかけて。」という記述もあり、『徒然草』第百五段「女となげしに尻かけて」の類似表現を『源氏物語』「帚木」巻に見出している。雨夜の品定めにおける左馬頭の目撃談で、ある殿上人が浮気な女と語り合うくだりである。以下に該当箇所を掲げる。

^② 神無月のころほひ、月おもしろかりし夜、(中略) この

女の家はた避きぬ道なりければ、^③荒れたる崩れより池の水かけ見えて、月だに宿る住み処を過ぎむもさすがにておりはべりぬかし。もとよりさる心をかはせるにやありけむ、この男いたくすずるきて、^④門近き廊の^⑤簀子^⑥だつものに尻かけてとばかり月を見る。^(注8)

佐野氏も、「尻かけて」の語釈において、「今日「腰かけて」といふと同意。源氏物語（帚木）に「門近き廊の簀子だつものに尻かけて」^(注4)」と言及し、「帚木」巻の同じ箇所を引いている。

これらは、いずれも「尻かけて」という表現に注目した引用であり、第百五段の母体が「帚木」巻であると指摘するものではない。しかし、近年では、『徒然草』第百五段と近似する場面として、『兼好法師集』三十三番歌と「帚木」巻の両方に注目し、さらには「尻かけ」という表現の特殊性と、その用例の極端な少なさを指摘した論考^(注5)も見られ、第百五段と「帚木」巻との浅からぬ関係が推察される。しかも、両者の類似は「尻かけ」という表現だけにとどまらないのである。右に掲げた範囲内において、「帚木」巻には、『徒然草』第百五段との共通点が他にもある。

両者に共通する表現に傍線を付し、番号で対応関係を示した。まず、「月下の男女が語り合う」という基本的な構図が一致する。傍線④では、それぞれ「御堂の廊」と「門近き廊」とあり、男女は建物の廊にいる。そして傍線⑤には、先行作品における使用例の非常に少ない「尻かけ」という表現が、共に用いられている。また、第百五段は筆者兼好の、「帚木」巻は左馬頭の視点で描かれている。第百五段の「何事にかあ

らん」や「けはひなど、はつればつれ聞えたるもゆかし」という表現には、兼好が単なる語り手ではなく、現場に居合わせた上で、物陰から覗き見ているような臨場感がある。これは「帚木」巻の該当箇所が左馬頭の日撃談であることと重なる。

このように『徒然草』第百五段は、従来指摘されてきた『兼好法師集』三十三番歌だけでなく、「帚木」巻との類似も指摘できるのである。

ならば、第百五段は、類似する二つのうち、どちらに基づいて描かれたと考えるべきであろうか。しかし、二者択一を迫る以前に、気になる点がある。それは、『兼好法師集』三十三番歌にもまた、『源氏物語』の「帚木」巻との類似が指摘できるからである。『徒然草』第百五段の場合と同様に、『兼好法師集』三十三番歌と「帚木」巻についてもその関連性を検証してみよう。両者の共通点には網かけを付し、同じ記号で対応関係を示した。

まず、場面全体の共通点として、「寒空の下、月下の男女が語り合っている」ことを指摘できる。また、(a)の「冬の夜」と「神無月のころほひ、月おもしろかりし夜、」という表現から、両場面ともに季節は冬と特定される。(b)では、両場面に「荒れたる」という言葉が使われており、荒涼感を漂わせている。(c)では、登場人物が「簀子」に「尻掛け

て」いる姿が描かれている。さらに（d）では、登場人物が「月を見」ている。

以上のように、『徒然草』第百五段と同様、『兼好法師集』三十三番歌も「帚木」巻と多くの共通点を有するのであり、第百五段の母体となる実体験を記したものとされる『兼好法師集』三十三番歌そのものが、必ずしも作者の体験そのままではなく、「帚木」巻に着想を得た虚構であつた可能性も、多分に指摘できるのである。

三

さて、『徒然草』第百五段と『兼好法師集』三十三番歌が、共に「帚木」巻を基に虚構が施されているとして、両者に見られる相違はどのようにして生じたのであろうか。第百五段は三十三番歌よりも文の量が多く、情景描写もより詳細なものになっている。また、第百五段には、「帚木」巻に描かれていない情景もあり、そのような点にも注目する必要があるだろう。

章段冒頭の「北の屋かげに消え残りたる雪」という表現について、稲田氏は、『白氏文集』巻十六の「庾樓曉望」を挙げ、次のように言及した。

私は「白氏文集」（巻十六、庾樓曉望）の詩句「子城陰処猶殘雪」（子城は北方の城の意）を想起していたと見たい。この詩句は、「千載佳句」（巻上・春曉）にも収載され、「源氏」（若菜上）にも、紫の上と別れる源氏が口ずさんでおり、人口に膾炙された詩句であつた。少なくとも「北の屋陰……」は、荒寥たる美的幻想を醸し出す用意として記されたとみなしたい。^(註7)

「北の屋かげに消え残りたる雪」という表現は、『徒然草』第百五段にのみ見られ、『兼好法師集』三十三番歌と「帚木」巻にはない。稲田氏はこの冒頭を、『白氏文集』「庾樓曉望」の詩句を念頭に置いたものと指摘する。「庾樓曉望」の全文は以下のとおりである。参考に書き下し文と現代語訳も付した。

獨	憑	朱	檻	立	凌	晨
山	色	初	明	水	色	新
竹	霧	曉	籠	衡	嶺	月
蘋	風	煖	送	過	江	春
子	城	陰	處	猶	殘	雪
衙	鼓	聲	前	未	有	塵
三	百	年	來	庾	樓	上
曾	經	多	少	望	鄉	人

獨り朱檻に憑れば 立ちどころに晨を凌ぎ
山色初めて明らかにして 水色新たなり。

竹霧 曉に籠む 嶺に銜まるる月、
蘋風 暖かに送る 江を過ぐる春。

子城の陰處 猶ほ雪を残し、
衙鼓聲前 未だ塵有らず。

三百年來 庾樓の上、
曾經て多少の望郷の人あらん。

私ひとり庾樓の朱の欄干にもたれてみると、みるみる夜明けになって、山の景色は明るくなりはじめ、川の景色もはつきり見えてきた。竹林の朝霧が山の端の残月をつつみ、水面の浮草をわたる風は暖かく春の大江にそよぐ。庾樓の出城の北にはまだ残雪があり、朝の時を告げる太鼓が鳴る前は、あたりに人通りはなく、まだ塵も立たない。既に三百年を経たこの庾樓では、今までに一体どれほどの人が私のように望郷の思いにとらわれたことであろう。

稲田氏が指摘するように「北の屋かげに消え残りたる雪」という冒頭は、頸聯の傍線②「子城陰處猶殘雪」を想起させる表現である。しかも、「庾樓曉望」と『徒然草』第百五段の

類似は、それだけではない。傍線①「立凌晨（立ちどころに晨を凌ぎ）」は夜明けの情景であるが、『徒然草』第百五段にも「有明の月」という描写があり、夜明け頃の可能性が高い。また、傍線③「未有塵（未だ塵有らず）」は早朝の人氣のない情景を詠んでおり、『徒然草』第百五段の「人離れなる御堂の廊」と重なる。このように、『徒然草』第百五段と「庾樓曉望」にはいくつかの共通点が認められる。

章段執筆の際、兼好は「庾樓曉望」の詩句を念頭に置いていたのであろうか。「庾樓曉望」の直接的な影響を指摘するには、兼好が『白氏文集』を手に取り、「庾樓曉望」の詩句を吟味する機会に恵まれていたことが前提とならなければならぬ。『徒然草』第十三段からは、『白氏文集』の愛読者としての兼好の姿を窺うことができる。

ひとり灯火のもとに文をひろげて、見ぬ世の人を友とするぞ、こよなう慰むわざなる。文は文選のあはれなる巻々、
白氏文集、老子のことば、南華の篇。此の国の博士ども
の書ける物も、いにしへのは、あはれなること多かり。

また、「庾樓曉望」の詩句は、日本でも『和漢朗詠集』や『千載佳句』などに採られ、『大江千里集』の句題にもなっていることから、広く人口に膾炙していたと考えられる。これらを踏まえると、『徒然草』第百五段の冒頭表現が「庾樓曉

望」からの引用である可能性は十分に考えられる。しかし、『白氏文集』から直接引用したのか、あるいは『千載佳句』などの和書を経由したものかはにわかに決しがたい。兼好の『白氏文集』受容に関して、久保田淳氏は次のような見解を示した。

「白氏文集」の場合は、「和漢朗詠集」に採られた詩句が多く、時には「千載佳句」にも採られているので、直接「文集」を出典としているのか、それとも「朗詠」その他に拠ったのかは、決め難い。しかし、兼好の教養を考えれば、直接「文集」から出た表現が多いのではないかと^(注1)思われる。

これに対し川口久雄氏は、

要するに白氏文集を代表的な愛読書としてあげるほどには文集の影は濃くない。せいぜい凶宅とか秦中吟とか新樂府どまりである。(中略) 文集の文句が多く散見するようだが、それらは文集を直接よんだというより、『和漢朗詠集』によって人口に膾炙している文集の文句より^(注2)とっている疑いが強いように私には思われる。

と、「直接「文集」から出た」と見ることは慎重であるが、いずれにしても、兼好が「庾樓曉望」の詩句を念頭に置いて、「北の屋かげに消え残りたる雪」という表現を用いた可能性

は十分に考えられる。

四

ところで、稲田氏は前述のように、『源氏物語』『若菜上』巻において、源氏が「庾樓曉望」の詩句を口ずさむことに言及したのであるが、どうやら「若菜上」巻のこの場面は、『徒然草』第百五段の情景とも重なる点が多いようである。「若菜上」巻の該当箇所を以下に掲げる。

妻戸押し開けて出でたまふを、見たてまつり送る。明け^⑤ぐれの空に、雪の光見えておぼつかなし。なごりまでと^⑦まれる御匂ひ、「闇はあやなし」と独りごたる。雪は所^①どころ消え残りたるが、いと白き庭の、ふとけぢめ見え^④わかれぬほどなるに、「猶残れる雪」と忍びやかに口ずさびたまひつつ、御格子うち叩きたまふも、久しくかか^③ることなかりつるならひに、人々も空寝をしつつ、やや待たせたてまつりて引き上げたり。^(注3)

稲田氏は「庾樓曉望」が人口に膾炙していたことを示す具体例として「若菜上」巻を紹介したのであるが、その指摘を受けて、三木紀人氏は「北の屋かげに消え残りたる雪」という表現について、次のような見解を示した。

従来の諸注・諸論はこの語を誤解し、本段の内容を冬のこととするが、残雪は詩歌の世界で春の風物である。前記『源氏物語』若菜上巻の場面は二月中下旬のことであり、『白氏文集』の詩の情景も春である。^(注1)

三木氏はさらに次のように述べ、『徒然草』第百五段と「若菜上」巻を重ねることに、積極的な姿勢を示した。

なお、若菜の巻の場面が女三の宮の降嫁にもとづく源氏と紫の上との微妙な心情のねじれを描く一節で、引用される詩句が源氏の心境の象徴となっていることからすれば、この段の男女の語らいの情景設定における「北の屋かげに……」はより深い意味を持つているかもしれない。^(注2)

そこで、『徒然草』第百五段と「若菜上」巻をもう少し詳細に比較してみたい。両者の類似箇所は傍線を付し、番号で対応関係を示した。まず、場面全体において、「凍てつくような寒い日に男女が語り合う」という、基本的な構図が一致している。「若菜上」巻では引用箇所の後に、源氏と紫の上の語らいが描かれている。次に傍線①を確認すると、季節の一致に関しては、三木氏の指摘する通りであり、「北の屋かげに消え残りたる雪」と「雪は所どころ消え残りたるが」から、両場面ともに春であることがわかる。一致するのはそればかりではない。「若菜上」巻で源氏が夢に紫の上を見て、急ぎ

帰るのは夜明け頃である。『徒然草』第百五段でも、傍線③「有り明けの月さやかなれども」という表現があり、おそらく夜明け頃の、まだほの暗い時分ではないかと思われる。他にも、両者共に傍線⑦のように、登場人物の芳香が描写されている。

以上のような共通点を踏まえると、『徒然草』第百五段冒頭の「北の屋かげに消え残りたる雪」は、「庾樓曉望」を直接に想起させる表現というよりは、源氏が「庾樓曉望」の詩句を口ずさんだ、「若菜上」巻の世界を取り込んだ結果の表現と考えるべきではないだろうか。というのも、『徒然草』第百五段の主題とも言える男女の語らいが、「庾樓曉望」には、全く描かれていないからである。兼好は、「庾樓曉望」の原詩を踏まえた上で、源氏がその詩句を口ずさむ「若菜上」巻の世界を、『徒然草』第百五段の情景に重ねたのではあるまいか。

五

以上の検討結果から、『徒然草』第百五段と『兼好法師集』三十三番歌は、いずれも「帯木」巻を下敷きにしている可能性が高い。そして、両者に稲田氏が指摘するような相違が生

じた主な理由は、『徒然草』第百五段の方には「若菜上」巻の情景が、さらに重ねられているからであると考えたい。

ここで改めて、『徒然草』第百五段・『兼好法師集』三十三番歌・「帚木」巻・「若菜上」巻の四者を、並べて比較してみることしよう。

『徒然草』第百五段

北の屋かげに消え残りたる雪の、いたう凍りたるに、さし寄せたる車の轆も、霜いたくきらめきて、有明の月さやかなれども、限なくはあらぬに、人離れなる御堂の廊に、なみなみにはあらずと見ゆる男、女となげしに尻かけて、物語するさまこそ、何事にかあらん、尽きすまじけれ。かふし・かたちなど、いとよしと見えて、えもいはぬ匂ひの、さとかをりたるこそ、をかしけれ。けはひなど、はつれはつれ聞えたるもゆかし。

『兼好法師集』三十三番歌

冬の夜、荒れたる所の簀子に尻掛けて、小高き松の木の間よりくまなく洩りたる月を見て、あか月まで物語りし侍ける人に

思ひ出づや軒のしのぶに霜さえて松の葉わけの月を見し夜は

「帚木」巻

神無月のころほひ、月おもしろかりし夜、(中略)この女の家はた避きぬ道なりければ、荒れたる崩れより池の水かげ見えて、月だに宿る住み処を過ぎむもさすがにておりはべりぬかし。もとよりさる心をはせるにやありけむ、この男いたくすすろきて、門近き廊の簀子だつものに尻かけてとばかり月を見る。

「若菜上」巻

妻戸押し開けて出でたまふを、見たてまつり送る。明けぐれの空に、雪の光見えておぼつかなし。なごりまでとまれる御匂ひ、「闇はあやなし」と独りごたる。雪は所どころ消え残りたるが、いと白き庭の、ふとけぢめ見えわかれぬほどなるに、「猶残れる雪」と忍びやかに口ずさびたまひつつ、御格子うち叩きたまふも、久しくかかることなかりつるならひに、人々も空寝をしつつ、やや待たせてまつりて引き上げたり。

『徒然草』第百五段と『兼好法師集』三十三番歌について、それぞれ、「若菜上」巻との共通点を傍線で、「帚木」巻との共通点を二重傍線で示し、対応する番号と記号を付した。すると、『徒然草』第百五段は「若菜上」巻との共通点が多く、

『兼好法師集』三十三番歌は「帚木」巻との共通点が多いことが、特徴として明確に浮かび上がってくる。

まず、二重傍線で示した『兼好法師集』三十三番歌と「帚木」巻の共通点を確認したい。二重傍線(ア)「冬の夜」と「神無月のころほひ」という描写から、季節は冬と判断できる。『徒然草』第百五段と「若菜上」巻は春である。二重傍線(イ)「荒れたる所」と「荒れたる崩れ」は、共に荒涼とした雰囲気醸し出しているが、『徒然草』第百五段と「若菜上」巻に類似の表現は見当たらない。「若菜上」巻の場面は、壮麗な六条院が舞台であるから、そもそも荒廃とは無縁である。さらに、二重傍線(オ)「月を見て」と「月を見る」も、『兼好法師集』と「帚木」巻のみの描写である。『徒然草』第百五段と「若菜上」巻では、男女が月を見る行為に言及していない。以上が、『兼好法師集』と「帚木」巻に共通する特徴である。

次に、『徒然草』第百五段と「若菜上」巻にだけ見られる共通点を確認する。傍線①「有明の月」と「明けぐれの空」から、時間帯は早朝の可能性がある。しかし、『兼好法師集』は時間幅が長く、「帚木」巻の時間帯は、漠然として特定できない。傍線②「えもいはぬ匂ひの、さとかをりたる」と「なごりまでとまれる御匂ひ」は、共に芳香に触れているが、

『兼好法師集』と「帚木」巻には見られない。傍線③に注目すると、『徒然草』第百五段では、語り合う男女の言葉が聞き取りにくく、「はつれはつれ聞えたるもゆかし」という描写などは、忍びやかな空気を漂わせている。そして、「若菜上」巻では、源氏が女三宮の寝所を去ることに対する非難を込めて、女房が「闇はあやなし」と独り言を漏らす描写や、源氏が「猶残れる雪」を口ずさむときの「忍びやかに口ずさみたまひつつ」という描写から、同様の空気が読み取れる。『徒然草』第百五段と「若菜上」巻を覆う秘めやかな雰囲気は、共通する特徴の一つである。これは、『兼好法師集』三十三番歌からは読み取ることのできない雰囲気であり、まして、「帚木」巻は全く趣の異なる場面である。「帚木」巻の男女は、覗き見る左馬頭の主観で滑稽に描かれており、特に女の方は、奥ゆかしさとは無縁である。傍線④「北の屋かげに消え残したる雪」と「雪は所どころ消え残したるが」という表現については、先述の通りである。これは、『白氏文集』の「庾樓曉望」を連想させる描写であり、「若菜上」巻では源氏がその一節を口ずさむ。しかし、『兼好法師集』と「帚木」巻には関連する描写は見られない。以上が、『徒然草』第百五段と「若菜上」巻にだけ見られる共通点である。

最後に「尻かけ」という表現に注目したい。四つの中で、

「若菜上」巻以外、全てに使われている表現である。ただし、『兼好法師集』と「帚木」巻で、それぞれ二重線(工)「簀子」に尻掛けて」と「簀子だつものに尻かけて」となっているものが、『徒然草』第百五段では「なげしに尻かけて」となっている。「尻かけ」の用例が希少であることを考慮すると、兼好が意識的に「尻かけ」という表現を用いた可能性は高い。そして、「尻かけ」をした場所が「簀子」ではなく、「なげし」に変更されていることも、意識的になされた可能性が高いのである。この変更は、『兼好法師集』三十三番歌と『徒然草』第百五段が同じく「帚木」巻に基づいて描かれたと考えた場合、前者では「帚木」巻の影響を色濃く残していたものが、後者ではそのような直接的な関係に気づきにくい方向への作意がなされたことを意味しているのではないかと思われる。

以上、四者を詳細に比較したが、そこからは少なくとも次の二点を指摘できる。一つは『徒然草』第百五段だけが「若菜上」巻との共通点を有していることである。そして、もう一つは、『徒然草』第百五段よりも『兼好法師集』三十三番歌の方が、「帚木」巻の影響を色濃く残しているということである。

従来から指摘されてきたように、『徒然草』第百五段は『兼好法師集』三十三番歌に近似している。しかし、それは、

三十三番歌と同じ体験を基に『徒然草』第百五段が描かれたからではなく、両場面が共に『源氏物語』「帚木」巻に発想を得て描かれたからであると考えたい。そして、『徒然草』第百五段は、『兼好法師集』三十三番歌に比べ「帚木」巻との関連がやや希薄であるが、それは「帚木」巻の影を意図的に薄めた上で、「若菜上」巻の情景を重ねたためである。

同じ作者の手になるものとはいえ、『徒然草』第百五段と『兼好法師集』三十三番歌の成立背景は異なるようだ。『兼好法師集』三十三番歌は自ら詠んだ歌でもあり、「帚木」巻とあまりにも近似することから、自身の体験を「帚木」巻の物語に重ねたと考えることができよう。しかし、一方の『徒然草』第百五段は、必ずしも兼好の実体験に基づいているのではなく、「帚木」巻を基にした下絵に「若菜上」巻の情景が彩色されているようである。この章段は、一見とりとめもなく書き綴られているようであるが、実は緻密な計算の上に組み立てられているのではあるまいか。

六

三木^(注)氏が示唆したように、『徒然草』第百五段は、その短い章段の中に、「若菜上」巻の世界を取り込んでいるように

思われる。「若菜上」巻の場面とは、どのような内容であったろうか。

「若菜上」巻において、源氏が女三宮を正室に迎えたことで、紫の上の立場は一変した。問題の箇所は、紫の上を夢に見た源氏が、女三宮の寝所を早々に抜け出して、紫の上の寝所に向かう場面である。しかし、源氏の仕打ちを不満に思う女房たちによつて、部屋に上げてもらえない。紫の上の苦悩と源氏の後悔が交錯する場面である。

『徒然草』第百五段に描かれる男女に、「若菜上」巻の光源氏と紫の上の姿を重ねてみたい。そうすると、『徒然草』第百五段に登場する男を、わざわざ「なみなみにはあらずと見ゆる男」と、非凡な姿で表現したことにも意味があったのだと思わざるを得ない。これは、兼好自身を第三者的に客体化したというよりは、光源氏のごとき物語の主人公を連想させる表現なのである。また、『徒然草』第百五段には「人離れる御堂の廊」とあり、男女は持仏堂へと続く廊で語り合っている。『源氏物語』で、紫の上が出家を志すようになるのは、女三宮降嫁により世の無常を痛感したことがきっかけであり、「若菜下」巻では源氏に出家を嘆願するも退けられる。そうした状況を踏まえると、第百五段で語り合う男女の先にある「御堂」の存在に、何やら意味深長なものを感じずには

いられないのである。

あらためて、兼好が『徒然草』第百五段を執筆した目的を考えると、この章段では、短い文章に奥深い物語性を付与する叙述方式が試みられたのではないだろうか。それは、あたかも、和歌がわずか三十一文字に世界を凝縮し得たように、である。

『徒然草』第百五段を読むと、不思議な感覚が生じる。読者は、表現の端々に既視感にも似た親しみを覚えながらも、事柄の核心へと辿り着くことができないもどかしさを感じる。その原因は、もとの文脈から切り離された表現が、表現として粒立ちながらも、その具体性が消されてしまったことに求められる。章段の背後に明滅する物語の影、その幻想的なイメージ喚起力を封じ込めたのが、『徒然草』第百五段だったのではあるまいか。兼好は短い章段の中に、一巻の物語に劣らぬ世界を凝縮して見せたのである。

注

注1 『徒然草』の引用は、『新編日本古典文学全集』（小学館 一九九五年三月）に依った。以下、同じ。

注2 『徒然草拾遺抄』の引用は、『未刊國文古註釋大系』（帝國教育會出版部 一九三五年四月）に依った。以下、同じ。

注3 『兼好法師集』の引用は、『和歌文学大系』（明治書院 二〇〇

- 四年七月）に依った。
- 注4 佐野保太郎『徒然草講義（上）』（福村書店 一九五三年二月）。
安良岡康作『徒然草全注釈（上）』（角川書店 一九六七年二月）。
- 注5 富倉徳次郎『類纂評釈 徒然草』（開文社 一九五六年五月）。
稲田利徳『徒然草論』（笠間書院 二〇〇八年一月）所収、
「徒然草」の虚構性。初出『国語と国文学』五三一六（一九七六年六月）
- 注6 「尋木」巻の引用は、『新編日本古典文学全集「源氏物語①」』（小学館 一九九四年三月）に依った。
- 注7 常亜蕾・吉海直人「尻かけ」考——『徒然草』の『源氏物語』引用——『同志社女子大学大学院文学研究科紀要』六（二〇〇六年三月）。
- 注8 『白氏文集』本文の引用は『白氏文集歌詞索引』（同朋社 一九八九年一〇月）に依った。読みやすいように適宜訓点を振った。書き下し文と現代語訳は『新釈漢文大系』（明治書院 一九八八年七月）を用いた。
- 注9 市古貞治編『諸説一覽 徒然草』（明治書院 一九七〇年二月）所収、久保田淳「出典・源泉・先蹤」。
- 注10 『徒然草講座第四巻 言語・源泉・影響』（有精堂出版 一九七四年一月）所収、川口久雄「徒然草の源泉——漢籍」。
- 注11 「若菜上」巻の引用は、『新編日本古典文学全集「源氏物語④」』（小学館 一九九六年一月）に依った。
- 注12 三木紀人『徒然草 全訳注（二）』（講談社学術文庫 一九八二年四月）。